

# 遊星人の海外研究記 その20 ～ミッフィーの街 オランダ・ユトレヒトでの研究生生活～

川島 由依<sup>1</sup>

## 1. はじめに

私は2018年10月から2020年9月まで、当時ユトレヒト（現在はライデンに移転）にあったオランダ宇宙研究所（SRON）で研究員として働いておりました。私自身、色々な国での研究・日常生活を知れることが面白く、これまでの方の海外研究記は楽しく拝読させていただいておりました。今回、寄稿のお話をいただき、（5年以上も前のことで記憶が曖昧なところもあり）当時の書類やメール、カレンダー、写真、Googleマップのタイムライン等、あらゆるものを掘り起こしながら執筆しました。本稿も、海外でのポストク先を考える博士課程の学生さんの参考や、どなたかの息抜きとして、もしお読みいただけたら幸いです。

博士課程最終年度の2017年、ポストク探しをするにあたり、海外での研究生生活を体験してみたいという思いがありました。アメリカ天文学会（American Astronomical Society; AAS）の公募ページ<sup>1</sup>を定期的にチェックして、私の専門とする系外惑星大気分野のポストク公募に何件か応募をしました。そうした中で、前述のSRONで系外惑星グループを率いるMichiel Min氏のグループのポストクに、運よく採用していただけることになりました。そのポジションは、私が博士課程修了後に手を広げてみたいと思っていた、系外惑星大気のスペクトル・リトリーバルコード開発に関わるものでした。Michiel Min氏とは事前の面識もなかったため、指導教官の生駒 大洋氏をはじめ、良い推薦状を書いてくださった方々のお陰と

大変感謝をしております。採用が決まったのは、博士課程修了月の2018年3月末でした。4月からの半年間は、東京工業大学（当時）地球生命研究所で井田茂氏・藤井友香氏に研究員として雇っていただくことが決まっていたため、その年の10月からSRONで雇っていただくことになりました。

余談ですが、この際の面接はオンラインでした。面接の案内メールに、ヨーロッパ時間10時/日本時間18時と書かれており、私はそれを鵜呑みにしてしまっていたのですが、実は面接の連絡を貰った日と面接日との間にちょうど、サマータイムの切り替わりがあったのです。そのため、実際には日本時間17時でした。面接開始の1時間半前（だと思っていた）に、面接で使用するSkype IDを連絡したところ、その20分後くらいに、後5分でコールをされるとの連絡を貰い、非常に慌てたのを覚えています。面接の練習を繰り返ししていたところだったのですが、お陰で緊張する間もなく面接が始まりました。結果的には幸いでしたが、大事なミーティングの時差計算は、自分でもしっかり確認をするべきだという当たり前の教訓を得ました。

## 2. オランダへの渡航準備と 現地での手続き

採用が決まってから渡航までは半年間あったこともあり、比較的余裕をもって準備ができました。ただ、海外への引越しは何かと考えることが多く、荷物の整理・配送手配や家具の売却、外務省での戸籍謄

1. 京都大学 大学院理学研究科 宇宙物理学教室  
ykawashima@kusastro.kyoto-u.ac.jp

<sup>1</sup><https://aas.org/jobregister>

本へのアポステューユ (公印)証明の取得, 厚生労働省が勧めるワクチンの予防接種, 携帯電話の解約等と, あっという間に半年間が過ぎていきました。

オランダ到着後はすぐに移民局に行き, 滞在許可証の申請をしました。通常は10日程で滞在許可証が完成するようですが, 私の場合, 三週間経っても完成の連絡が届きませんでした。そこで移民局に向き問い合わせたところ, 何等かの不具合で, システム上で申請が通っていなかったことが発覚しました。私は渡航1ヶ月半後にイギリス出張を予定していたのですが, 移民局で確認したところ, 滞在許可証の取得前にオランダを出国すると再入国ができなくなると言われ, 焦りました。結局, イギリス出張出発の十日前に滞在許可証を受け取ることができ事なきを得たのですが, 遠慮せずに問い合わせる重要性を学びました (ちなみに, 滞在許可証が完成したとの連絡を受けて受け取りの予約を取ろうとしたところ, 出張の出発日までに予約が空いている日がありませんでした。そのため移民局の人に頼み込んで, なんとか予約を入れてもらいました)。

### 3. SRONでの研究生活

SRONのサイエンス部門には天体物理学と地球科学の二つがあり, 系外惑星グループは, 天体物理学部門の中にある三つのグループのうちの一つでした。系外惑星グループは発足して間もなく, 当時はグループリーダーのMichiel Min氏と同僚のポスドク1人, 私の計三人しかいませんでした。そのため研究発表セミナーとしては, ユトレヒトから電車で20分程のアムステルダムにある, アムステルダム大学に週一度行き, 系外惑星・円盤グループ (Jayne Birkby氏, Jean-Michel Désert氏, Carsten Dominik氏らが所属)のものに参加をさせて貰っていました。アムステルダム大学の系外惑星・円盤グループはビジターの訪問も多く, やはり島国である日本とは異なる陸続きの国の良さを改めて実感しました。他の方も書かれていましたが [例1, 2], ビジター訪問時に議論を希望する人がスプレッドシートに書き込むというスタイルは, (私はアムステルダム大学で初めて経験したのですが)学生やポスドクも気軽に議論を申し込むことができ, とても良いシステムだと思いました。定期的



図1: 研究所のメインルーム。全体ミーティングや, Borrelがここで開かれていました。

な週の用事は, アムステルダム大学の研究セミナーしかありませんでした。日本の大学では, 研究発表セミナー以外にも輪講や論文紹介ゼミ等, 複数の定期ミーティングがあることが多いかと思うのですが, (そのような環境から来た身からすると少し驚きつつも) その分, 研究に打ち込む時間をしっかりと確保できたのは良かったです。

Michiel Min氏は, 欧州宇宙機関の, 系外惑星の大気観測を専有の目的とする初の宇宙望遠鏡Arielのオランダ代表をされていたこともあり, Arielのコミュニティにも入らせて貰うことになりました。三ヶ月に一回, ヨーロッパの各国で代わる代わるArielの定期ミーティングが開かれていたこともあり, 色々な国を訪れ, (ヨーロッパを中心とした)系外惑星大気関連の知り合いを多くつくることができました。また, ヨーロッパ内の国への出張のしやすさを活かし, オックスフォード大学, UCLでの研究滞在や, プラハやアイスランド, バリで開かれた研究会など, 色々経験させていただきました。

研究所での日常生活についてですが, お昼は, 地球科学部門のポスドクの人達が誘ってくれるようになり, ユトレヒト大学 (SRONはユトレヒト大学のキャンパス内にありました)の食堂で食べていました。そのメンバーでは, 誰かの家に集まってボードゲームをすることも何度もあり, 楽しく交流をさせてもらいました。また, キャンパス内には大学の植物園があったのですが, ユトレヒト大学とSRONの職員は植物園の入場パスを無料で貰うことができたため, お弁当をもって行き, 植物園で食べることもありました。研究



図2: クリスマスギフトとして研究所から配られたギフトカードとチョコレート。

所では、毎週金曜日の17時半から19時くらいまで、Borrelと呼ばれる飲み会が博士課程学生によって開催されていました。他のグループの学生・ポスドクと知り合う機会になった他、オランダ、またヨーロッパの研究・日常生活の情報を色々と得られたので、楽しかっただけでなく、とても有意義でした。

オランダ、またヨーロッパの研究機関でどの程度一般的なことかはわからないのですが、SRONは組織としての温かみを大事にしている印象を受けました。年に一度、研究所の遠足イベント（一年目は屋外の映画撮影所に行きミニ映画を撮り、二年目はボートに乗った後、ゴルフをしました）があった他、レストランでのクリスマスパーティーもありました。また、クリスマス休暇前には、研究所からのクリスマスプレゼントとして、SRONのイニシャルSの形をした大きなチョコレートとギフトカードが全員に配られました（図2）。

また勤務制度についてですが、（良く知られている話かとは思いますが）地形が平坦なオランダは自転車文化です<sup>2</sup>。家から研究所までの距離が（確か）約8 km以下の場合、自転車での通勤圏内だとみなされ、定額の自転車用通勤手当となるようでした。また、有給休暇が豊富（年間40日以上！）にあるのですが、有給休暇を返上（上限はあります）して働くことで給料に変換できるオプションがある他、三日程度の有給休暇の返上で自転車を購入できる<sup>3</sup>という選択肢もあり、オランダならではのユニークさを実感しました。

<sup>2</sup>二年間のオランダ滞在中に坂を登った経験が一度しかありません！

<sup>3</sup>その制度を利用して自転車を買ってみたのですが、その後、残念ながら盗難被害にあいました。



図3: 部屋の窓から見えた羊。

## 4. オランダでの日常生活

渡航後のオランダでの住居についてですが、研究所の人事課からの紹介で、大学のキャンパス内にある学生アパートに住まわせて貰えることになりました。このアパートは滞在期間の上限が一年と決まっていたのですが、ただでさえ慌ただしい渡航後に、ホテル住まいをしながら住居探しをしなくてよかったのは非常にありがたかったです。SRONは、ユトレヒト大学のサイエンス・パークと呼ばれる理系キャンパス内にありました<sup>4</sup>。アパートはそのキャンパス内にあったため、職場まで徒歩5分という、非常に恵まれた通勤環境でした。一方、（面積が必要な理系キャンパスにありがちですが）市街地からは5 km程離れた位置にあり、土日に閑散としたキャンパスに残り続けるのは物悲しい気持ちになりました。市街地まではバスで20分程だったのですが、出不精な私はバスに乗るのが億劫になり、特に渡航してからの最初の半年間は秋冬で寒さが大の苦手なこともあり、引きこもりがちになってしまいました。ちなみに、アパートの窓からは目の前の羊牧場？（図3）が見え、毎朝、羊を窓からほーっと眺めるのを楽しみにしていたのですが、冬の間はどこか暖かい場所に移るのか、ある日突然いなくなってしまう、とても悲しかったのを覚えています。

そこで二年目のアパートは、市街中心地に探すことにしました。運良く、ユトレヒト中央駅から10分程の運河沿いのアパートを借りられたのですが、これ

<sup>4</sup>ちなみにもう一つ、SRONはグローニンゲンにも拠点があります。



図4: ヌトレヒトの運河。アムステルダムと異なり、歩道よりも一段低いところにあります。中心地(左図)には、運河沿いにレストランが並んでいます。

が大大正解でした!一年目の大学のアパートと比べると家賃は二倍になったのですが、家の周りにスーパーやレストランが豊富にあり、またユトレヒト名物の運河(図4, 5)もアパートのすぐ真横を流れており散歩にも最適で、余暇がとても楽しくなりました。駅前毎週土曜日に開催される市場にも気軽に行けるようになり、オランダのスーパーでは見掛けなかった、アサリやエリンギなどの様々な食材も手に入れられるようになりました。また、日本人の方が経営されている日本食レストランが家から徒歩圏内にあり、美味しい日本食を求めて定期的に通うようにもなりました。私はジェラート(特にレモン味!)が大好きなのですが、高緯度で22時頃まで明るい夏には、運河沿いにジェラート屋さんの露店ができ、夕飯後にジェラートを買って食べながら運河沿いを散歩することが日課となりました。性格に依るのだと思いますが、私のような、食べることが好きで寒さ嫌いの出不精タイプは、少し家賃が高くなっても生活が便利な場所に住むことを強くお勧めします。

アパート探しは、募集サイトを定期的のみで希望を出し、向こうから連絡が来れば内見ができるという仕組みでした。ただ、アパート探しの競争率が高いオランダでは、内見の連絡を貰えたのは30件のうち数件程度だったかと思います。日本でのアパート探しと比較し驚いたのは、まだ前の住人が住んでいる状態で内見をすることです。前の住人の引越後、すぐに次の人を入れられるので大家さんにとっては確かに効率が良いのですが、日本でのアパート探ししか知

らなかった私にとっては、とても新鮮でした。また、家具付きのアパートを借りたのですが、歴代の住人が残した小物も大量に残されている他、生きている植物があり、水をあげて育ててくださいと言われたことも、驚きました。今は自分でも植物を育てていますが、土に触ることが苦手な植物に触るのにも勇気が必要な私にとっては、小学校以来はじめての植物育成が強制的に始まりました。何の植物かもわからないまま<sup>5</sup>定期的に水をあげていたところ、半年後くらいに突然大きな花が咲き、とても驚いたのを覚えています。

言語について、オランダの公用語はオランダ語ですが、英語に最も近い言語の1つであることもあり、英語が通じないことは全くありません。そういう意味では、非英語圏のヨーロッパの国の中では生活がしやすく、ポストク先としてお勧めかと思います。私はユトレヒト大学のオランダ語講座を最初のうちだけ受講していたのですが、日常でオランダ語がわからず困ることもほぼなかったため、オランダ語より先に英語を磨く方が有益だと思い、(今思うと、せつくなので続けても良かったと思うのですが)辞めてしまいました。その代わり、研究所の職員研修の枠組みで、語学学校の英語講座の費用を負担して貰えることがわかり、非常にありがたく活用させていただきました。

<sup>5</sup>今、Google画像検索(初めて使いました)で試しに当時の写真を入力してみたところ、アマリスであったことが6年越しにわかりました。Google画像検索は便利ですね。



図5: 家の目の前にボート乗り場があったので、試しに一度、乗ってみたときの写真。日本のようにライフジャケットが配られる訳ではなかったので、危険を感じました。一度、モーターボートとぶつかりそうになってしまい、帆先を向こうの人に変えて貰い、なんとか事故を回避できました。

海外滞在の前に健康診断<sup>6</sup>を受けた方が良いというのは良く聞く話かと思いますが、特に歯科治療は済ませておいた方が安心かと思います。私の場合、渡航前には痛みを感じたことがなかった親知らずが突然痛みだしました。街の歯医者に行き、抜歯治療が可能な総合病院の予約を取って貰ったのですが、結局、その予約日より先にひどい痛みが生じてしまい、最終的には総合病院の休日診療に電話をして緊急で抜いて貰いました。大変でした。

なお、オランダで過ごして、日本の配達制度の便利さを実感しました。オランダでは配達時に不在の場合、近所の配送センターに届けられるか、近所の家に配達されるケースが多かったです(配達的时间指定ができる業者もあるのですが、できない業者が大半でした)。特に前者の場合、自分で配送センターまで出向き受け取らないといけないのですが、遠い時に



図6: 突如咲いた、アパートに備え付けられていたアマリリス (だとわかった)。

は5 km程、離れていたりします。そのため重いものを購入した場合、一人暮らし、かつ車も運転できない私のような人にとっては、受け取りの難易度が高すぎると思いました。また、ミニ冷凍庫を購入したときは、一度の配達時に不在だっただけで購入がキャンセルされ、出荷されたベルギーの倉庫に戻ってしまい、落胆しました。結局、その冷凍庫を再度購入し直しました。二度目の配達のはたまたま受け取れ、最終的には冷凍庫をゲットできたのですが、気楽に構えることが大事だという理解を得ました。

## 5. さいごに

海外生活は、準備や手続き等がとても大変でしたが、研究・生活面の双方で新たな文化を知ることができ、とても刺激になりました。もし、海外での研究生活を悩まれている方がいましたら、ぜひ挑戦してみてくださいと思います。きっと、かけがえのない経験になるかと思えます。もし、オランダでの研究・日常生活につい

<sup>6</sup>日本のような職場での健康診断は、オランダにはないようです。

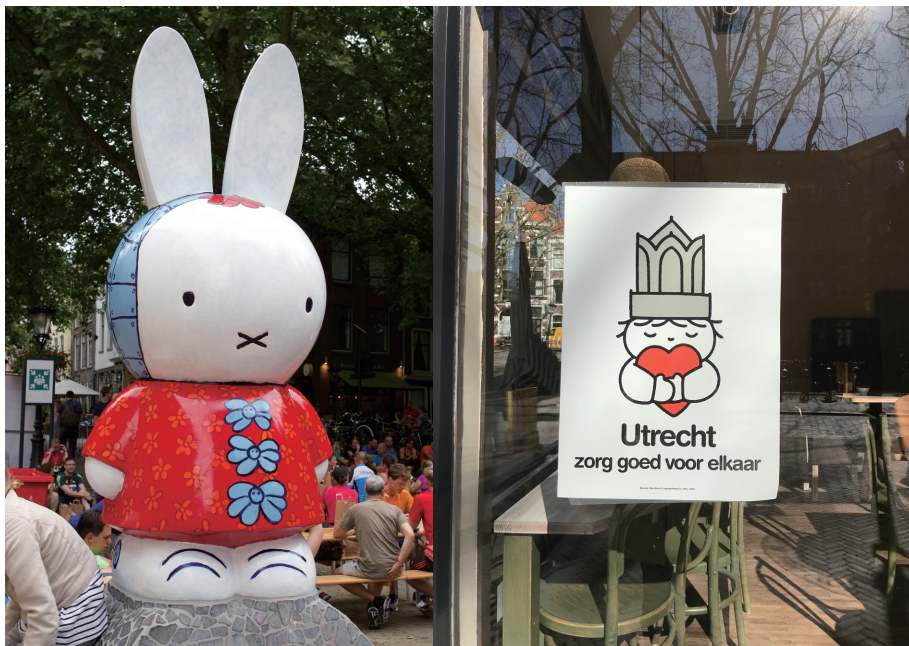


図7: タイトルにも含めましたが、ユトレヒトはミッフィー (ちなみにオランダ語では、ナインチェNijntjeといいます)の作者ディック・ブルーナさんの出身地でもあり、街中のあちこちにミッフィーの像やモチーフがありました (左図)、またコロナ禍には、ミッフィーに出て来るキャラクターのポスターが街のいたるところに貼られました (右図)。

て聞きたい方がいらっしゃいましたら、(少し前の話にはなってしまいますが)お気軽にご連絡ください。

なお、滞在の最後の半年間は、残念ながらコロナ禍と重なってしまい、そのまま2020年8月中旬に日本に帰国するまで在宅勤務となりました。私は2020年の3月から、アムステルダム自由大学の修士課程学生を半年間、インターン<sup>7</sup>として受け入れていたのですが、初めての研究指導でありながら、最初の二週間しか対面での指導ができなかったことはとても大変でした。

最後に、二年間、SRONで研究員として雇っていただいたMichiel Min氏、ならびに大学院の指導教員の生駒大洋氏をはじめ、これまで、また現在の研究生活でお世話になっているすべての皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。また、本稿の執筆の機会をくださいました黒澤耕介氏にも感謝いたします。

<sup>7</sup>(どの程度一般的なことかわからないのですが、)二年間の修士課程中に半年程度のインターンを三回程度行い、そのうちの1つを修士論文として提出することがあるようです。そのため、私もその学生さんの修士論文審査に審査員の一人として加わりました。

[1] 大野和正, 2024, 遊星人 33, 196.

[2] 青山雄彦, 2025, 遊星人 34, 135.

## 著者紹介

川島 由依

京都大学 大学院理学研究科 宇宙物理学教室 助教  
 東京大学 大学院理学系研究科 地球惑星科学 専攻 博士課程修了。東京工業大学 地球生命研究所 研究員, SRON Netherlands Institute for Space Research 研究員, 理化学研究所 基礎科学特別研究員, 宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所 特任助教, 東北大学 学際科学フロンティア研究所 助教を経て, 2024年10月より現職。専門は系外惑星科学 (特に大気)。日本惑星科学会, 日本天文学会, 日本地球惑星科学連合に所属。